新村出博士と国語学

池上禎造

京の夏は大文字の送り火と共に動き始める。消える火に去りゆく夏を思ひつつ帰れば、庭には今日初めて秋の虫が鳴きだしてゐたりするのである。例年にない暑さ続きの今年は盆を過ぎてもまだむし暑さの去らない十八日の昼下り、新聞社からの電話で新村博士の追悼文を求められて、迂濶にも初めて前夜の訃を知ったのであった。動転した心に、二時間の期限で何が書けるであらうか。その尻切れの作文の後味の悪さが、わたくしにこのたびの本稿を、適任かどうかも考へることなく簡単に引受けさせてしまったのである。五十代半からの円熟された博士しか知らないわたくしは、この一世の碩学を恩師とよび得る幸運に引き違へ、偉すぎてわれわれなどが弟子づらをするのもをこがましい雲の上人——退官前、すでに正三位勲何等といったことも含めてもよい——だといふさびしさやるせなさをも禁じ得なかったので、この機会にあらためて、国語学史上に占められる座を見究めておきたく思ふ。九十年の長きにわたる生涯の詳細や、その折折にものされた長短さまざまの論文随筆については、晩年のお仕事を手伝はれた、当時京大助手、現上智大教授の柊源一氏の労に成る別項の表について見られたい。

それらを通して、わたくしは博士の一生を四乃至五の時期に分けて考へる。第一は明治九年の出生から二十九年の大学入学までの成長期、第二は明治三十年代の東京における活躍と四十年代初頭の第一次外遊の、学者としての修業と出発の時期の十年余りである。第三は帰朝して京都に着任の四十二年から始まる京大教授の時期で、昭和十一年定年退官まで三十年近くの長きにわたる。これを大正と昭和とに小分してもよからう。昭和元年（大正十五）は数へ年五十一才にあたり、学的業績の中心といふべき東方言語史叢考はその翌年の出版なのである。第四は退官後の三十年を、戦前戦後の別なく一つに扱ふ。このうち第一期については年譜にゆづることとするが、第一高等中学校ごろのこと、この方面を志望されるに至った因縁などについては、自ら書かれたもののあることを一言しておく。（国語学10）

二十九年に入学された大学の博言学講座は、その前々年帰朝の上田万年博士により主宰されてゐた。さきにチェンバレンにより伝へられたこの学問は、日本人の教授によってうけつがれ、活気が漲っ

てゐる時だったらしい。大学の生活の二年目の終近く、先輩らと共に「言語学会」の作られたことは、かかる機運を物語る。その機関誌「言語学雑誌」は二年遅れ、卒業後に創刊されるが、そこにおける活躍ぶりは、当時の博士を、またこの学問のあり方を物語る。不幸二年たらずで廃刊になったけれども、この雑誌のもつ意義は大きい。この廃刊と入れ違ひに、明治三十五年、文部省に国語調査委員会のおかれたことは幸ひだった。明治時代における国語学上の業績で注目すべきものの大半はこの委員会から出てゐることは周知の通りであって、それがやはりこの上田博士の施策の一環なのである。これよりさき、三十二年に卒業された博士は直ちに大学院に残って上田博士の指導の下に「国語学」を研究されることになり、一年づつ順次、助手・講師・東京高等師範学校教授と累進され、三十七年には高師教授のまま東大助教授を兼ねられるのであるが、三十五年国語調査委員会が発足するや補助委員の任務をもたれることは、その後の研究に役立つことも多かったやうである。

大学の学生として最初のリポートは「日本音韻研究史」であったが、この新しい言語学では音声・音韻の研究から入るのが常道であったから、まづその学史が取り上げられるのも不思議ではなかった。さらに音声の具体的研究には一つの機会が訪れた。若い英人エドワーゾの来日である。三十四、五年の交、彼に資料を供するため、自らの発音をカイモグラフにとったりする新しい方法を学ばれることになったのである。（高松義雄訳　日本語の音声学的研究）国語調査委員会における仕事としても音韻関係を多く受け持たれたやうである。音韻にも関係があるが、方言の調査もこの頃盛んになってきた。博士のあちこちに出張された報告は震災で失はれて記録のみが残ってゐる。一方、語法についても、西洋文典の焼直しに類するスクールグラマーに対する反省がおこる時期であったから、新しい学問を身につけた側からとの間で、これは論争といふ形をとることもあった。二十代の博士は元気であったやうである。また、対象を日本語にしぼられはしたものの、研究法としてあちらのものに対する注意も怠られなかった。例へば先述のエドワーゾからもたらされたイエスペルセンの「言語進歩論」、ポールパシーの「声音学大意」といふ紹介が見られる。また言語学は即ち言語史といふ考へ方の一般的な時代であるから、近刊のスキートの「言語の歴史」もエドワーゾに示されて注目されたもののやうである。（本書の紹介は、やや後の、金田一京助博士の「新言語学」である。）凡そ歴史的研究は文献の整理を必要とする。或いは東寺に悉曇学書を調べ、（勧智院金剛蔵悉曇書目として、橋本進吉博士の増補されたものあり）或いは建仁寺に抄物をさぐるといったことも、この期に始められてゐるのである。さうして最後に、大英博物館ボドレイ文庫の伊曽保・平家・金句集を初めとする吉利支丹資料が、第一次外遊において博士をとらへるのであった。今日の国語学の史的研究の諸領域の大体にわたる問題が点本を除いて、既に明治三十年代にこんなに出揃ってゐたことを見て驚嘆するばかりである。

明治三十九年、京都帝国大学に文科大学が置かれることになった。博士はこちらへの勧めを受けて、四十年、京大の助教授として外遊されたのであった。（京都大学文学部五十年史、本篇及び附録の博士回想文）四十二年四月帰朝、五月十七日教授に昇進、九月の新学年から言語学概論の講義が始められた。時に三十四才。その年の専

攻の学生があったかどうか知らないが、とにかく大正時代の卒業者は十指に充たず、昭和十一年まで併せて三十余名であった。（以文会会員名簿）概論は国文・英文など専攻外の者も、文学科全員必修だったが、特殊講義の方は勿体ないことだったろう。国語研究法・印欧言語学・ロマン言語学・ゲルマン言語史・ウラルアルタイ言語学・音声学・音声史論・言語比較法などの題目が大正時代には見える。これらについては著書や論文の形になってゐないやうだが、紹介乃至解説的な要素があったからだらう。尤も当時の出版事情からして、国語研究法——同名の書は先輩の藤岡勝二博士のものが四十年に出てゐる——か音声学かでなければ、出せさうにはない。

博士は他大学へ出講せられたことを聞かないが、原稿の求めには随分ひろく応じられたもので、有名無名いろいろの雑誌や新聞から不定期刊行の特殊出版物まで、おびただしい数と幅とをもつ。京都の文学部の機関誌芸文は四十三年創刊、昭和六年廃刊なので、博士の活動の最も盛んだった第三期前半にあたり、最も自由にふるまはれ、長短はとはず、登載回数は余人を抜いて多い。この期の特徴は、歴史的研究のものが目立ち、文法に代って語源語史に関するものがふえてきたことと、研究史・書志に関するものの多いことである。例へば昭和十八・二十年に出た選集の南蛮篇所収の諸論は、西教・典籍・芸術・洋学・海槎・鎖国・情趣の七篇に分類されてゐるが四分の三まではこの期のものである。そしてこれらは割合短篇の、調査や考証風のものであって、これと語源語史に関するものが量的には第一位になる。

しかし博士の本領は、国語の史的研究にあると認むべきで、その集成が東方言語史叢考なのである。第二期のものも含むが、第三期前半に成るものが多く、また国語周辺の諸言語にも及ぶが故に「東方」と名づけられるが、国語が中心である。国語の音韻史に関する周到な論文、中世日本語研究の開拓など、国語の史的研究の模範が見られる。古い朝鮮語の数詞の発掘など名人芸といふべきものもある。上田万年博士の開かれた道は、「国語のため」などによっての大まかな方向指示であったが、ここに初めてはっきりした姿の、史的研究法の実践が見られるのである。

音韻や語法といふ一まとめにし易いものに対して、語彙は一つ一つの問題である。その史的考証への傾斜が強くなったのが第三期の後半である。昭和五年東亜語源志の刊行を見るのは象徴的である。事実、本書所収の語源関係の論文の大半は昭和初年に成るものなのである。ただし、これにも音韻史や書志などの、前書に入るべきものが含まれてゐる。後奈良院御撰何曽の、本居内遠の解釈を破って音韻史に利用された名人芸で有名な「波行軽唇音沿革考」もここに収められる。

わたくしが博士の名を知ったのは昭和初年、京都の高等学校での亀田次郎講師の文法の時間だったと思ふ。そして三年生の冬、大毎支局のホールで書志学に関する、吉沢義則博士とお二人での講演会があって、初めて両博士のお顔を見、お声を聞いたのであった。——家にはラジオはなかった。——吉沢博士は嵯峨本について、新村博士は印刷や装幀についてのひろいお話で、モリスのケルムスコット版といふ語が、あの場面と共に耳に残ってゐる。その講堂は今もあって、国語学会の京都の催しで泉井・遠藤両博士の前座をつとめに、二十年ぶりに行った時は、往事を思ひ感慨にたへなかった。

翌五年から博士の講筵に列することになる。自らも言はれるやうに、冥想しながら、言葉を味ひながら語られる講義は印象的であった。その代り、ノートを整理してゆくと、文脈がコンタミネーションどころか、迷宮入りしてしまふので困るといふ友人もあった。そこまではゆかなくても、縷々綿々と語られる傾向は、この期から次期にかけての文章にもあらはれてくる。岩波講座日本文学の言語学概論などそれである。さて、この頃の特殊講義は記録によると、「文法の理論的及び歴史的研究」とか「国語と近隣諸民族語との比較」とか「言語系統論」などの題が見えるが、昭和五年度は「語源研究法」だった。専攻の二年以上の者のための講義なので、他専攻の一年生は隅の方で恐る〳〵うかがった。その後、言語史学・国語音声論・言語史理論と、毎年この時間が最も楽しみで、またこれらから受けた知識の量は勿論、考へ方についての薫化も計り知れないであらう。前期のこの講義の題目と比べて、昭和になると博士自らの研究の成果を語られるものへと変ってゐる。

しかし、これらが活字になってまとめられることは少い。講義にも色々の種類がある。聞いてゐるときは退屈でも、すぐそのまま本になって、後に参照するのには便利なやうな型もある。反対に、時間中面白く、かつ非常に有益でも、そのままでは本になりにくい型もある。言語生活のあり方といふ点からすれば、前者の型は初めからプリントにでもして与へるべきであるとわたくしなどは考へるけれども、話手・聞手の条件や性格により、話の内容の性質により、簡単に言へない点もある。とにかく博士のは後者の型なのである。ところで、その中間的な講義録といふものがあって、講座といふ名の出版物が昭和には目立った現象となった。これらは小項目的な方向にすゝみ、かつ読み切りで、更に岩波のやうな分冊形式にまでいった。博士の国語系統論（国語科学講座）はその形であって、圧縮されてゐる。講義録といふのは本来講義筆記であるから、聴講者が書けばよいといった考へ方もでき、大家のものには、もとはさういふのも多かったらしい。昭和初年、京都の文献書院からの国文学講座は他の業者の手に渡って改編無断出版の問題も含むが、その言語学概論は極めて誤植が多かった。星野書店からの序説のもとになるものである。当時の講座の予告には博士の名は大抵出るけれども、実物では必ずしもその通りにいってゐない。またどちらかといへば、国語学畑のもう少し若い方々の執筆にと時代は動いてゐて、最小限南蛮文学（新潮社・岩波日本文学・同日本歴史）をお願ひするといった傾向が見られる。

昭和三年に大槻文彦博士がなくなられて、折角の大言海の中断が案じられたが、その完成のために関根正直博士（その後間もなく逝去）と共に博士が後の面倒を見られた。それは、完成後第四冊の後記に

予、大言海第二巻の中部以後の検校に参与せるに当りて、原著者の所説を考察して、或は語原語釈に、或は語史語例に、往往異見あるを免れざりしと雖も、一に故人の考案を尊重して、敢て妄りに改竄を加へず、僅かに魯魚の誤を正ししに止まれり。

とある通り控へめではあったがことに外来語の記述などについては自ら厳密な検討を加へられたやうである。第三巻分あたりから、その下でのお手伝ひをすることになったわたくしは、教室での講義の実地練習をする機会を与へられたわけで、長男秀一氏にしたがってそのお宅に、或いはすぐそばの博士のお宅に週二三回うかがった。

いつも何か調べものをして居られて、それのメモはカードでなく罫紙にとって綴ぢ合はされるので、おびただしい罫紙の綴りを拝見したのもその折のことである。禅林象器箋・枳橘易土集とか、或いはHobson-Jobson（奇しくも近着書目にこれの重版のことが見える）とかSino-Iranicaとかを使ったりすることも覚え、既成の辞書に孫引きがいかに多いかを知ったりして、自分のものは何も書かなかったけれども、大学院時代の楽しい前半であった。

昭和十一年十月退官の博士は、どこかへ教へに出られることもなく、前と同じく調べものや執筆の活動を続けられたから、大学でもよくお見かけした。語源語史や研究史的な方へ一層傾かれたが、「国語問題正義」のやうな規範論への関心の深まりが注意せられる。戦争末期は紙も割当てになり出版は困難であるだけに、博士のやうな方のものへの割当ての可能性が多いとでもいふことだらうか、色々のものをまとめられることができた。「吉利支丹文化史」や「外来語の話」のやうに、小冊ながらよくまとまったものは、今日新書版の重版にしても市場価値もありさうである。さらに十八年からは選集まで出始めた。京都の出版社からで広告も少く、流通もわるくずっと後に知ったやうなことであるが、今から見れば、これだけでも出てよかったらう。創元選書の「言葉の歴史」や「日本の言葉」も、昭和初年の主著が絶版のために、戦後の学生に十分役立ってゐる。ただ、同一論文があちこちに再収されてゐるので、人に奨める時にわたくしは度々困惑した。詳しい著述目録を必要とする所以でもある。暗く苦しいその頃は御無沙汰がちであったが、ただ一つ、昭和十年刊行の「辞苑」増補の企てのことは述べねばならない。今度は構想を新にして、ラルース風に、事典的要素も含むものにするといふ計画が、仏文学者の次男猛氏とご一しょで進められ、猛氏はこれに没頭されるやうに見受けた。これがその後、岩波書店と結びつき、内容についても幾度か増補更新されつつ「広辞苑」となったのである。語志（前からは語源語史と述べてきたが博士はよくこの語を使はれた。少し意味がひろくなるであらう。）に傾かれた博士の最後の結果が辞書であることは偶然ではないのである。

自然を友として歌を作り悠々自適して、もともと頑健ではない体をいたはりつつかやうな仕事をつづけられた博士も、最愛の賢夫人に先立たれ、或いは御所附近の散歩で自転車に接触を受けられなどいふことが重なった。その後猛教授にあったら、昔のことは確かだが新しいことに対して記憶が目立って衰へられたことをうかがった。それより少し前、「日本民俗学」に和歌森太郎氏の「柳田国男先生を訪ねて」そのお弱りのさまを報ずる一文を読んで、数ケ月後紙上に悲しい記事を見てゐたので、どきっとしたが、幸ひそれも忘れる頃、しかし同じ八月、この旧友どうしはどこで再会して居られるだらうか。

朝日新聞連載の「折り折りの人」の欄で、吉川幸次郎博士は草創期の京大文学部の教授をわけて、眼光の炯々爛々と人を射る型と、ややおだやかで、それだけに複雑な型とにせられた。博士はそこに挙ってないが、後者に属するだらう。しかしお若い頃はどうだったらうか。田口卯吉氏との論争などを読むと眼光まで鋭さうに感じられる。不愉快なこと、いきどほろしいことがあれば、その言葉の語源を調べることにしてゐるとよく語られたものである。さういふ自

制の結果か、若くから教授といふ重い職責の然らしめる所か、われわれが接した頃には温厚そのものであった。かへって、古い卒業生の中には、それをじれったがる人もあったと聞く。叱られることも少かったらしい。しかし一度、大言海の進行途中、たまたま企画中の平凡社の大辞典のために若干の原稿を書く話しがあった。両者は時間的にも内容にも抵触するものでなかったが、博士は倫理的にさういふことを許されなかった。晩年、国語問題や風致問題で、いはゆる保守の説を持されたやうであるが、かの言語学雑誌で見ると、言文一致会なるものをつくり、その推進に寄与されたことも知られた。（国語と国文学四四―四山本正秀）常々何かの年代を示すには必ず西紀と日本の年号とを併せて挙げられた。今日から見れば何でもないことだが、戦前にはそれのしにくい時すらあったが、かういふ合理精神がいつも通ってゐたのである。

博士の語源考証には色々の書物からの例が出るけれども決して網羅主義ではない。あることを論ずるための必要にして十分といふことを考へられてのことであらう。近年は多々増々弁ずるといった感じで不必要な余分の例をも挙げる傾向なしとしない。この認定は微妙であるが、若い層ではきっと例が少くて、随筆的だとでも思ってゐる人もあると思ふ。それについて思ひ出されるのは、よく「見識」といふことを言はれた。例へば伴信友と新井白石に引用が及んで、白石を高く評価されるのである。ただ丹念な考証と、全体を見透す綜合力との問題である。

もとより博士も人であるから限界を免れない。漢学の素養も深いけれども、その言語の学問については清朝の考証学者まで、現代の人はあまり出なかった。西人でも、ヂャイルズの辞書までで、カールグレンが不思議と出なかった。それを心得てゐられて、その方面の話しのあと、大学へ入れば遠慮なく色々の人の門を叩けと言って高畑彦次郎氏に紹介していただいたことがある。いはゆる上代特殊仮名遣についても消極的な関心でなかったかと思ふ。しかし、卒業論文で魏志倭人伝の例まで挙げたのに対して「若気の至り」といふ批評をいただいたのは有難いことと思ってゐる。史的研究に、資料とする文献の性質を考へることの重要性が常識になったのはもっと後のことだったからである。ソシュールは紹介されてゐたが、自分は理論よりも、史的研究の立場をとると、限界を守られた。いかに柔軟な、弾力性のある頭脳でも、ある時を越えれば受け入れにくいやうになるのが人間であらう。そこに、限界を知ることも大切なことと知らされるのである。

われわれは、国語学といへば山田孝雄博士や橋本進吉博士の業績を思ひ浮べる。新村博士のものはそれらと大分感じが異なる。文学にも広い関心をもたれる博士の南蛮紅毛への陶酔などそれぞれの方々の性格・持ち味・学風でもあるが、その外何かないだろうか。対照的なお二人についていへば新村博士は言語学講座を主宰されたが故に言語学者とし、橋本博士は国語学講座を主宰されたから国語学者といふのも皮相の見に違ひない。言語学・国語学の問題は長くなるからここでは言はないが、両者の違ひをこれに帰することはできない。するとやはり、僅か六年の違ひであるが、新村博士は創業、橋本博士は守成といった角度で考へるべきかと思ふ。

――大阪大学教授――